動補動詞の形成

望　月　圭　子

中国語学 第237号　抜刷
中国語学会　平成２年（1990）10月10日　発行

動補動詞の形成

望月圭子
（東京外国語大学）

This paper proposes a new strategy of generating resultative compound verb (henceforth, RCV) within the framework of GB theory.

I suggest that most of RCV are generated syntactically by means of 'Verb Raising'. I also make some comments on unique types of RCV sentences, which require a great deal of pragmatic competence to interpret.

0. はじめに
1. 動補動詞の由来
2. 動補動詞の形成
2.1. 動補動詞の種類
2.2. 動補動詞の統語的形成
2.3. 動詞繰り上げ
3. 動補動詞と「得」を伴った動補構造句
4. 動補動詞を用いた特殊な文
5. 結び

0. はじめに

本稿は，中国語の結果を表す動補構造を形成する複合動詞（本稿では，便宜上'動補動詞'と呼ぶ）について分析する。分析はＧＢ理論の枠組みで，主に次の点をめぐっておこなわれる。即ち，動補動詞は，'中心語移動'（Head movement）の一種である'動詞繰り上げ'（Verb raising）を経て，統語的に形成されるという点，またこの手順によれば，動補動詞文の目的語が二重のθ役割を担うことがなく，その結果θ規準に違反せず，かつ格付与にも問題が生じないという点である。

1. 動補動詞の由来

太田辰夫（1958，204—210頁）は，中国語の動補動詞を次の二種に分けている。

i　使成複合動詞：打／推／拉倒

ii　結果複合動詞：写／学／办好

さらに，彼は，古代の例として以下の例文を挙げている。（日訳も太田による。①はｉの，②はiiの例）

① 四畔放火烧死（舜子至孝変文ｐ.2721）〈四方から火を放ち焼殺す〉

② 不可再做错了（朱13）〈ふたたびなしあやまってはいけない〉

太田によれば，使成複合動詞は，遅くとも唐代には成立していたが，結果複合動詞は，使成複合動詞からの類推によって生じたもので，その成立は遅く，唐代以前はほとんど用いられていない。

太田は明確には述べていないが，ｉは動補動詞の後項が，'動作主或いは被動者(対象)'について述べるタイプであるのに対し，iiは動補動詞の後項が，前項である動詞そのものについて述べるタイプである，と考えることができる。iiはｉよりの類推によって生じたものであるという太田説に従って，本稿ではiiのタイプについては論じないことにする。

太田は，ｉの使成式複合動詞が成立した原因について，次の二点を挙げている。

ａ．古代語では，等立的複合動詞と認めるべき「扑灭」「击破」などの後項は自・他両用動詞であったが，時代が下がるとともに自動詞として固定した。[1)]

ｂ．次の例のように，特殊ではあるが一種の使役句中の二つの動詞が合体して一個の複合動詞となった。

ⓐ　我憎汝状，故破船坏耳（幽明录，珠林67）〈我々は汝の罪状を憎み，故に船を破り壊すのである〉

ⓑ　当打汝口破（幽明录，广记319）〈お前の口を打ちわるぞ〉

ⓒ　今当打汝前两齿折[2)]（贤愚经11）〈いままさに汝の前の歯二枚を打ち折るべし〉

上記の二つの原因のうち，ｂは本稿にとって重要である。なぜなら，ｂは，現代語の動補動詞が統語的語形成によって成立したことを歴史的に証明するものであるからである。また太田は「打倒」〈倒す〉，「弄死」〈死なす〉，「搞坏」〈壊す〉の前項動詞は，その表わす動作が特定のものと限らず，代替性の強い動詞であるとして，次のような古い例を挙げている。

③　被那虚底在里夹杂，便将实底一齐打坏了（朱13）〈その虚なるものがなかに混じっているので実なるものまでもだめにしてしまう〉

④　是那个弄死的（灰阑记１）〈誰が殺したのか〉

この事実も，後述のように，現代中国語の動補動詞が統語的に形成されたことへの傍証になる。

2.　動補動詞の形成

2.1.　動補動詞の種類

動補動詞は，その後項が文中で何を指向するかによって次の四つのタイプに分けられる[3)]。

(1)　主語指向型

⑤　我走累了。〈私は歩き疲れた〉

⑥　她病倒了。〈彼女は病に倒れた〉

⑤の「累」，⑥の「倒」はそれぞれ主語「我」「她」について述べている。

(2)　目的語指向型[4)]

⑦　我踢伤了他。〈私は彼を蹴って怪我をさせた〉（原義に忠実に訳すなら，〈私が彼を蹴った結果，彼が怪我をした〉）

⑧　哥哥骂哭了弟弟。〈兄が弟を罵って泣かせた〉（同上，〈兄が弟を罵った結果，弟が泣いた〉）

⑦の「伤」，⑧の「哭」はそれぞれ目的語の「他」「弟弟」について述べている。

(3)　動詞語幹指向型

⑨　我吃完了饭了。〈私は御飯を食べ終わった〉[5)]

⑩　父亲喝多了酒了。〈父は酒を飲みすぎた〉

⑨の「完」，⑩の「多」はそれぞれ動詞語幹「吃」「喝」について述べている。このタイプは，太田説によれば類推によって生じたものなので，前述のように，本稿では扱わない。

(4)　有標型

動補動詞が二項動詞として機能しているが，無標の場合の意味関係‘動作主＋Ｖ＋対象’の型をとらないタイプである。

⑪　那顿饭吃坏了我的肚子。〈（言わんとする意味は）あの御飯を食べて私はおなかを壊した〉

⑫　这种酒喝醉过不少人。〈（同上）この種の酒を飲んで多くの人が酔っ払ったことがある〉

2.2.　動補動詞の統語的形成

生成文法理論において，語形成がどの部門でおこなわれるか，即ち統語部門においてなのか，語彙部門においてなのかについては，かなり議論の分かれるところであった。しか

し，最近の動向としては，日本語学において，影山太郎・柴谷方良（1989）が次のような主張をしている。即ち，日本語の複合語には，語彙部門で生成されるものと，統語部門（ないしは音韻部門）で生成されるものの二種類があり，両タイプの複合語間には，生成部門の違いに起因する相違点があると主張しているのである。

影山太郎（1989，83—86頁）は，この主張を支持する例として，日本語の複合動詞の例を挙げている。彼の説明を要約すると次のようになる。日本語の複合動詞は，語彙部門で生成されるタイプのもの（Aグループの動詞）と，統語部門で生成されるタイプのもの（Bグループの動詞）の二つに分けられる。

A．押し倒す，書き込む，飲み歩く，泣き叫ぶ，投げつける，持ち上げる，食べ残す，使い果たす等

B．書き始める，食べ終える，走り続ける，助け合う，食べない，書きやすい，聞いてみる，飲んでしまう，置いておく等

AグループとBグループの相違は，前者の動詞は，その前項を「そうし(て—)」という照応表現におきかえられないが，後者の動詞は，おきかえ可能という点にある。次の例のうち，⑬はAグループの動詞文，⑭はBグループの動詞文である。

⑬　太郎はご飯を全部食べたが，次郎は {＊そうし / 食べ} 残した。

⑭　太郎が本を読むと，次郎も {そうし / 読み} 始めた。

影山によれば，本来，「そうし（て）—」等の照応表現がBグループの動詞の前項に許されるということは，文構造において，Bグループ動詞の前項と後項が統語的に独立した単位を形成しているということである。そして，統語的に独立した単位である前項と後項を音声的ないし形態的に一語にまとめる規則として，‘述部繰り上げ’という語形成規則が想定できるとしている。

本稿では，中国語の主語・目的語指向型動補動詞も，影山の言うBグループ動詞同様，統語的に形成されたものと想定する。その根拠は，一つには，第一節で示したように，歴史的に検証される点，もう一つには，後述のように，統語的語形成を想定した方が，GB理論の枠組みにおいて，θ役割付与や，意味解釈がより統一的に説明されるという点の二点による。

2.3.　動詞繰り上げ

日本語変形文法では，伝統的に‘述語繰り上げ規則’が統語部門で適用されると考えられ，特に使役構文はそれが適用される典型例であった。また，中国語学においても望月八十吉（1977）が，標準理論という古い枠組みでではあるが，述語繰り上げ規則が結果を表す補語の生成に適用されることを示している。

井上和子（1989）は，$\overline{X}$理論を用いた最も新しい枠組みで，日本語の複合動詞文（使役文，受動文，間接受動文，使役受動文，可能文等）が‘中心語移動’(Head movement) を経てどのように生成されるかを提示している。以下，井上の手法が中国語の動補動詞の生成にも適用されることを示す。

まず，主語指向型動補動詞文の例として，⑮を考える。

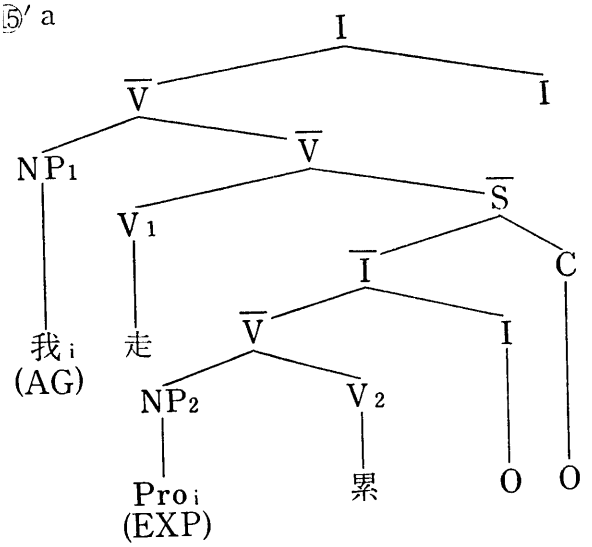
⑮　我走累了。〈私は歩き疲れた〉

⑮のD構造を⑮′aのように想定する。

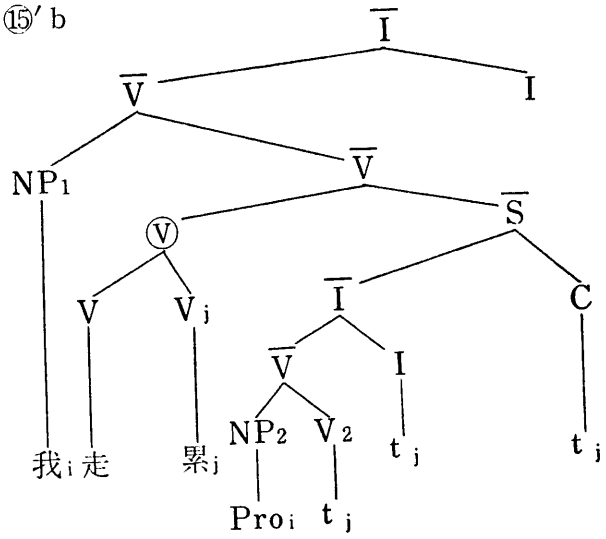
但し，　C：Complementizer
I：INFLECTION
AG：AGENT
EXP：EXPERIENCER

以下，⑮′aの図について説明を加える。まず，中国語の主語の位置づけについてである。中国語における主語の位置づけは未だ明確ではない[6]が，日本語の主語とかなり類似した特

⑮′a



⑮′b



性をもっと考えられる。そこで，Fukui(1986)や井上（1989）で提案されている日本語の主語の位置づけ同様，$\overline{V}$に付加された位置，即ち$\overline{V}$の‘外項’（external argument）に中国語の主語がくると本稿は想定しておく。

次に，⑮′aにおけるθ役割付与について説明を加えよう。D構造においては，動詞が名詞とどのような意味関係をもつかが決定されなければならない。即ち，動詞は各名詞句にθ役割を与えなければならない。⑮′aにおいて，「走」の主語「我」は‘動作主’というθ役割を「走」から付与される。一方，「累」の主語としては，「我」と同一指示のProという空範疇を設定する。Proは「累」から‘経験者’というθ役割を付与される。Proを設定することにより，「我」が「走」と「累」からそれぞれ‘動作主’と‘経験者’という二重のθ役割を付与されることを回避し，‘θ規準’（θ-criterion）を満たす。つまり，Proの設定はθ規準を満たす為に不可欠なのである。

さて，⑮′aは，⑮′bのようなS構造へと変換される。即ち，中心語移動によってそれぞれの主要部であるI，Cに支配される位置へと順に繰り上げられ，最後に$\overline{V}$の主要部であるVに編入されるのである。

t_jは，移動の痕跡で，くりあげられた動詞「累$_j$」と同一指標をもち，いづれも‘適正に統率されている’（properly governed）から，‘空範疇原理’（Empty category principle）に違反しない。

次に，目的語指向型動補動詞文について考える。例として⑯を挙げる。

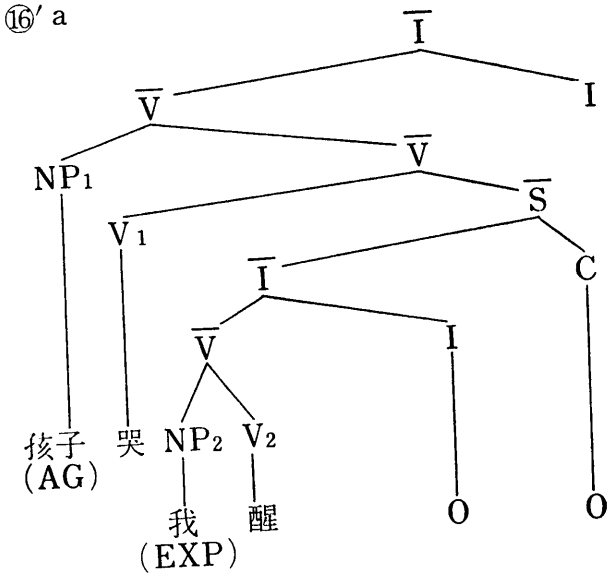
⑯　孩子哭醒了我。〈子供は泣いて私を起こしてしまった〉

⑯のD構造は⑯′aと想定する。

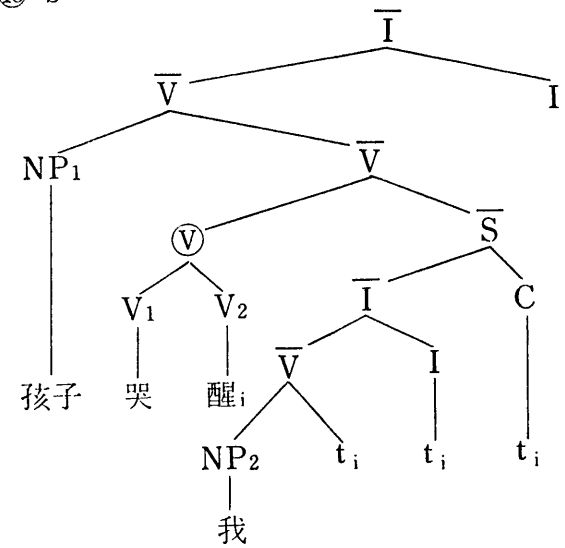
「醒」は，⑮と同様，動詞繰り上げ規則によってV_1に編入され，⑯′aは⑯′bというS構造になる。

t_iは「醒」が移動した際の痕跡で，いづれも適正に統率されている。⑯′bで，「哭」と

⑯′a



⑯′b



「醒」は複合動詞として一語にまとめられ，他動詞となる。[7]「我」は，Ⓥによって統率され，Ⓥから抽象的な目的格を得る。

さて，上述のような動補動詞生成のメカニズムは，次の二つの制約をはらんでいる。

一つ目の制約は，後項動詞に‘付加語’(Adjunct) がついている場合，動詞繰り上げはおこなわれない，という制約である。例えば，「走」に「很累」を編入させて，

⑰　＊我走很累了。

を派生することはできない。「很累」中の中心語「累」のみを繰り上げても，

⑱　＊我走累很。

という，中国語では許されない語順をもった非文が生成される。

二つ目の制約は，繰り上げられる動詞は，原則として一音節（一字）でなければならない，という制約である。例えば，次の対比が例として挙げられる。

⑲　女儿长 {胖 / ＊美丽} 了。〈娘は成長して {まるまるとなった / きれいになった}〉

しかし，例外もある。例えば，

⑳　我把衣服洗干净了。〈私は服を洗ってきれいにした〉

が挙げられる。

3.　動補動詞と「得」を伴った動補構造句

黄正德（1988）は，中国語の単純動詞に能格動詞がかなり存在するのと同様に，動補動詞にも能格動詞が多いことを述べ，「气死」「吓昏」「笑死」「喝死」「醉倒」「喝醉」「看瞎」「吃坏」などを例語として挙げている。そして「气死」を用いた例文として㉑を挙げている。

㉑a．他气死我了。〈彼は私に死ぬほど腹を立たせた〉

b．我气死了。〈私は死ぬほど腹が立った〉

黄はさらに，㉑a・bに対応する「得」を伴った表現（黄の用語によれば“述补结构”）として，㉒a・bを挙げている。

㉒a　他气得我半死。〈彼が腹を立てたので私は半死半生の目にあった〉

b　我气得半死。〈私は腹が立って半死半生のおもいをした〉

黄の説明を要約すると，次のようになる。

「气死」と「气得半死」の区別は，「担心」〈心配する〉と「开玩笑」〈からかう〉の区別に相当する。即ち，「气死」「担心」は複合語であり，「气得半死」「开玩笑」は句である。ところで，‘格理論’(Case theory) では，全ての音形をもつ名詞句は一つの抽象的な‘格’(Case) をもたなければならない。複合語は，格を名詞句に与えるが，句は与えることができない。よって，「我很担心他。」〈私は彼がとても心配だ〉と言えるのと同様（「担心」が後続の「他」に対格を与える），「他气死我了。」と言うこともできる（「气死」が後続の「我」に対格を与える）。一方，「＊我开玩笑他。」と言えないと同様（「开玩笑」が「他」に格を与えない），「＊他气得半死我。」と言うことはできない（「气得半死」が「我」に格を与えない）。この二つの非文は，次のように言わなければならない。

㉓　我开了他的玩笑。〈私は彼をからかった〉（意味上の目的語が「玩笑」の“准

定语”になっている）

㉔　他气得我半死。（＝㉒ａ）（意味上の目的語が「半死」の“准主语”になっている—筆者注・黄の言う“准主语”とは，統語的には主語だが，意味的には目的語と言うことであろう）

筆者は以上の黄の見解に対して，以下のような異なった見解を持っている。

(1)　中国語の格付与は‘隣接の条件’（Adjacency condition）に従わなければならない[8]が，㉒ａでは，「气」と「我」の間に「得」という要素が介在しており，隣接の条件に違反している。「得」の存在が隣接の条件に違反すると思われる根拠として，次のような例を挙げることができる。

㉕　她骂他骂得他哭了起来。〈彼女が彼を罵しったので，彼は泣き出した〉（湯（1989. a，63頁）の例文による）

㉕では，最初の「骂」は最初の「他」に対格を考え，一方，二つ目の「骂」は二つ目の「他」に対格を与えることができず，「哭了起来」が二つ目の「他」に主格を与えると考えるのが妥当である。

(2)　『现代汉语八百词』の挙げる次の例から見て，「气」は能格動詞と考えるべきである。

㉖　故意气了他一下。〈わざと彼をちょっと怒らせた〉（他動詞文）

㉗　气得眼睛都瞪圆了。〈腹を立てて目が大きく丸く見開いた〉（自動詞文）

㉖が他動詞文であることは問題がないとして，㉗を自動詞文とする根拠は，「＊气（了）眼睛」という表現が不可能であるからである。㉔の「气」をふりかえってみると，㉔の「气」は目的語を持っておらず，自動詞とみなされる。「他」が「谁」に対して腹を立てているかは㉔のみだけでは不明なのだが，聞き手が推測によって「谁」を特定しているにすぎないのである。無標の状況下では，「他」が腹を立てている対象は「我」と判断するのが妥当であるが，このことは統語論の問題ではなく語用論の問題なのである。

以上述べた二点から考えて，㉒ａ・ｂを㉑ａ・ｂに対応する表現と考えるのは妥当とは思えない。結局，筆者が2.3で前述した「原則として一音節の動詞でなければ動詞繰り上げがおこなわれない」という中心語繰り上げに関わる制約によって，㉒ａのような表現にならざるを得ないというのが，目下最も妥当な説明であろう。以上述べたことは，中心語繰り上げによって動補動詞が形成されるという本稿での主張の妥当性をさらに裏づけるものでもある。

なお，李临定（1986, 242頁）は次のような例㉘・㉙を挙げ，㉘を㉙のように“把字句”に変換できることを以って「妈妈」が“受事”であることの根拠としている。

㉘　气得妈妈晕过去了。〈腹を立てたのでお母さんは気を失ってしまった〉

㉙　把妈妈气得晕过去了。〈お母さんを怒らせて，気を失わせてしまった〉

しかし，筆者の考えでは，「把」は必ずしも対象を提前する介詞ではない点，さらに「气（了）妈妈」は可能であっても「＊气眼睛」が不可能である点を考えれば，“把字句”変換説も再考を要する[9]。（李が挙げている㉘㉙は，いづれも主文の主語が省略されているので，例文としては不適切と思われる）

4.　動補動詞を用いた特殊な文

動補式動詞を述語とする文の中には，その動補式動詞が二項動詞として機能しながらも，文中の二つの名詞句との関係が，無標の場合の意味関係である‘動作主＋Ｖ＋対象’とはかけはなれた，一見奇異に見える意味関係を持っている次のような文が存在する。（㉚は黄正德（1988），㉛～㉝は李明（1985）による）

㉚　那顿饭吃坏了我的肚子。〈（直訳不可能なので意訳すると）私はあの御飯を食べておなかを壊した〉

㉛ 这药吃好了不少病人。〈(同上) この薬を飲んで多くの病人が良くなった〉

㉜ 这种酒喝醉过不少人。〈(同上) この種の酒を飲んで多くの人が酔っ払ったことがある〉

㉝ 辣椒吃坏了鲁迅先生的胃。〈(同上) 魯迅先生はトウガラシを食べて胃を壊した〉

黄は，㉚は次にあげる自動詞文㉞に対応する他動詞文であるとしている。

㉞ 我的肚子吃坏了。〈私のおなかは(何かを)食べて壊れた〉

㉚の目的語「我的肚子」は㉞では主語になっていて，黄の言うように，「吃坏」は確かに能格動詞である。しかし，「吃坏」は，先に挙げた能格動詞「气死」とはある点で異なる。「气死」を用いた他動詞文と自動詞文を㉟㊱としてここに再録しよう。

㉟ 他气死我了。

㊱ 我气死了。

「吃坏」を用いた㉚㉞のペアと，「气死」を用いた㉟㊱のペアを比較してみよう。各文の文頭のいわゆる主語は，㉟㊱では〔＋動物〕で，‘動作主’という θ 役割をもつのに対して，㉚～㉝では，いづれも〔－動物〕で，‘道具’(Instrument) という θ 役割を持つ。

ここで，次のような例を考えて，㉚～㉝において，なぜ‘道具’という θ 役割を持つ名詞句が主語になっているのかを考えてみよう。(詳細は井上和子(1976)第4章参照)

㊲ 他们用放射性物质污染了空气。〈彼らは放射性物質で空気を汚染した〉(「他们」が‘動作主’という θ 役割を担っている)

㊳ 放射性物质污染了空气。〈放射性物質が空気を汚染した〉(「放射性物质」は‘道具’という θ 役割を担っている)

㊴ 空气污染了。〈空気が汚染した〉(「空气」が‘対象’という θ 役割を担っている)

注意すべき点は，「汚染」の主語については，次のような優先順位があるということである。

i ‘動作主’‘道具’‘対象’をそれぞれ担う名詞句が存在する時には，‘動作主’を担う名詞句が優先して主語になる。(㊲の場合)

ii ‘動作主’を担う名詞句が存在せず，‘道具’‘対象’を担う名詞句が存在する時には，‘道具’を担う名詞句が主語になる。(㊳の場合)

iii ‘対象’を担う名詞句のみ存在する時には，‘対象’を担う名詞句が主語となる。(㊴の場合)

このことを考慮した上で，㉚～㉝の主語を検討すると，それぞれ「吃坏」「吃好」「喝醉」「吃坏」という動補動詞の後項「坏」「好」「醉」「坏」の表わす状態をもたらす為の‘道具’である。‘道具’という θ 役割を担う名詞句が主語になっているという点で，㊳と㉚～㉝は共通しているのである。但し，㉛㉜の目的語「病人」「人」は，いづれも‘動作主’と‘経験者’という二重の θ 役割を持っており，こうした現象は「汚染」の例を以って解釈できず，問題が残っている。

いづれにしても，本節で扱った特殊な文にみられる，二項動補動詞と文中の二つの名詞句との意味関係はかなり自由で，多分に語用論的要素に依存する意味解釈規則によってこれらの特殊な文が解読されるようである。これらの特殊な文に現われる動補動詞は，統語的に派生されたものではなく，語彙的複合動詞とみなす方が妥当であるように思われる。

吕叔湘は「汉语句法的灵活性」(1986) で，中国語における，語用論に深く依存した文法現象をさまざまな様相から提示しているが，‘孤立語’的性格の強い中国語は，言語能力以外の知的能力(‘常識’と言ってよいかもしれない)を極度に必要とする言語であると言ってよいと思う。その程度は，恐らく，日本語よりもはなはだしいのではないだろう

。㉚〜㉝が日本語にはとても直訳できないうな中国語特有の特殊な動補動詞文であるとは，このような推測を支持するように思れる。

5. 結び

以上，中国語の動補動詞について，日本語における最近の理論的成果を応用しつつ，をすすめた。今後の課題は，4.で扱ったよな，語用論的意味解釈を必要とする動補動の複合について，さらに研究をすすめ，中語の統語的語形成と語彙的語形成についてより明確な輪郭を示すことである。

注

.）太田は次のような興味深い事実についても述べている。即ち，「压杀」と「压死」は互いに意味・用法を異にしている，という事実である。両者は，目的語をとる時，あるいは被動の場合には，意味・用法が同じであるが，目的語がない時，例えば，

a．他压杀了。

b．他压死了。

では，意味が同じとは限らず，a.は目的語が省略されているので「誰を(何を)」が明確でない。この太田の言及は，言いかえれば，「压杀」が対格動詞で，「压死」が能格動詞であることを示している。

2）「折」は，現代語では“zhé”“shé”の2種の発音があり，前者は他動詞，後者は自動詞である。『贤愚经』ではどちらの発音であったか興味のある問題である。

3）濱口（1990）は，動補動詞の前項・後項及び動補動詞自体が自動詞，他動詞のいずれであるかを規準に，次の分類をおこなっている。

a．自＋自→自
　我走累了。〈私は歩き疲れた〉

b．他＋自→自
　西瓜吃厌了。〈西瓜は食べあきた〉

c．他＋自→他
　我打死了他。〈私は彼を殴り殺した〉

d．自＋自→他
　他哭哑了嗓子。〈彼は泣いてのどをからした〉

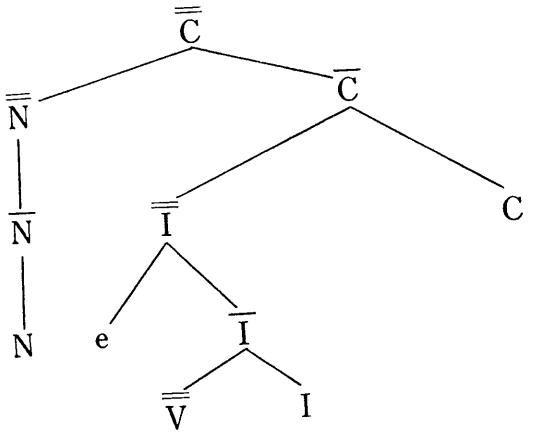
この分類から分かるように，動補動詞の前項は，自・他いづれの場合もあり得るが，後項は原則として自動詞(形容詞を含む)である（詳細は望月圭子（1990，19—21頁）を参照)。尚，動補動詞には能格動詞が多いから，bの「吃厌」は「我吃厌了西瓜。」〈私は西瓜を食べあきた〉ともなるし，また，dの「哭哑」は「他的嗓子哭哑了。」〈彼ののどは泣いた結果かれた〉ともなる。dの例文中の「哭哑」を湯廷池氏は“假及物动词”と呼んでいる。

呂叔湘（1986）は，別の観点から動補構造の詳しい分類をしている。

4）動補動詞が能格動詞の場合には，注3で述べたように，(1)(2)の両型を兼ねることになる。但し，特定の文中では，どちらかの型として機能する。主語・目的語双指向型は存在しない。後項が原則として自動詞であるからである。

5）この例は，〈私は御飯を全部食べた〉の意にもなる。この時は，目的語指向型である。

6）湯（1989e，16頁）は，中国語の統語構造を$\overline{X}$理論の枠組みで下図のように想定している。



湯の枠組みによると，中国語の主語は，D構造において，英語と同様に $\bar{I}$ の外項として出現するが，中国語には‘一致’(Agreement) がない為に，英語のように，Agr. から格が付与されない。そこで，主語は，‘格フィルター’(Case filter) 違反にならないように，‘α 移動’(Move α) によって $\overline{C}$ 外項の位置に移動する。

7) 「哭」と「醒」という二つの自動詞が統語的複合を経て他動詞になる現象についてはさらに検討されなければならない。

8) ‘隣接の条件’とは，「中心語がある要素に格を付与する際には，両者は隣接していなければならない」という条件で，中国語はこの条件に従わなくてはならないが，日本語はこの条件に従わなくてもよい。次に挙げる例はこのことを示している。

i　我父亲慢慢地吃饭。
ii ＊我父亲吃慢慢地饭。
iii　私の父はゆっくり御飯を食べる。
iv　私の父は御飯をゆっくり食べる。

なお，湯(1988 a，518頁)は，本節にみられる「得」の文法機能・意味機能及びその発生の由来については，未だ満足し得る説明が与えられていないと述べると共に，同頁注で，閩語では，「他骑马骑很快」のように，「得」を伴わないで，“情态补語”を後続させることができると述べている。

9) 吕叔湘 (1986, 9 頁注) も，“「把」字句”と“「被」字句”及び「把」「被」を用いない文という三者間の“変換”の可能性と制限はとても複雑で，まだ詳しく論じられていない，と述べている。

〈参照文献〉

Broadwell, George A. 1988. “Multiple θ-role Assignment in Choctaw”, Syntax and Semantics, 21, 113-127.

丁声树等1961.『现代汉语语法讲话』。商务印书馆。

Fukui, Naoki. 1986. A Theory of Category Projection and Its Application. Ph. D dissertation. M.I.T.

濱口英樹1990.「中国語の統語構造——日本語・英語との比較による分析」，北九州大学大学院修士論文。

Hashimoto, A. Y. (余霭芹) 1966. Embedding Structures in Mandarin. Project on Linguistic Analysis Report No. 12. Columbus: The Ohio State University Research Foundation.

———, 1971. Mandarin Syntactic Structure. Unicorn (Chi-Lin) No. 8. Princeton: Chinese Linguistics Project, Princeton University. (中国語訳：宁春岩・侯方訳 1982.『现代汉语句法结构』，黑龙江人民出版社。日本語訳：中川正之・木村英樹訳 1986.『中国語の文法構造』，白帝社)

黄正德1988.「中文的两種及物動詞和两種不及物動詞」(‘第二届世界華文教學研討會’における発表原稿)

今井敬子1985.「‘結果を表わす動補構造’の統辞法」，『中国語学』232号，23—32頁。

井上和子1976.『変形文法と日本語（下）』。大修館書店。

———1989.「主語の意味役割と格配列」，『日本語学の新展開』くろしお出版，79-101頁。

影山太郎1989.「形態論・語形成論」，『講座・日本語と日本語教育——第11巻，言語学要説(上)』明治書院60—92頁。

影山太郎・柴谷方良1989.「モジュール文法の語形成論」，『日本語学の新展開』くろしお出版，139—166頁。

小泉保1990.『言外の言語学——日本語語用論』。三省堂。

李临定1986.『现代汉语句型』。商务印书馆。

———1988.「语义的隐含性和制约性」，『语法研究和探索㈣』，236—245頁。

李明1985.「底层宾语移位到句首充当表层

主语的句式研究」，『研究生论文选集』江苏古籍出版社，223-240頁。
吕叔湘1986.「汉语句法的灵活性」，『中国语文』第1期，1—9頁。
星月圭子1990.「日・中両語の結果を表わす複合動詞」，『東京外国語大学論集』第40号，13—27頁。
星月八十吉1977.「中国語の動詞繰り上げ」，『中国語学』224号，60—69頁。
太田辰夫1958.『中国語歴史文法』江南書院。
易廷池1982.「國語詞彙學導論——詞彙結構與構詞規律」，『教學與研究』第4期（國立臺灣師範大學文學院），39—57頁。
———1988 a.「關於漢語的詞序類型」，『漢語詞法句法論集』臺灣學生書局，449—537頁。
———1988 b.「普遍語法與漢英對比分析」（‘第二届世界華文教學研討會’における発表原稿）。
———1989 a.「為漢語動詞試定界説」，『漢語詞法句法續論』臺灣學生書局，1—42頁。
———1989 b.「新詞創造與漢語詞法」，同上，93—146頁。
———1989 c.「詞法與句法的相關性：漢・英・日三種語言複合動詞的對比分析」，同上，147—208頁。
———1989 d.「普遍語法與英漢對比分析：‘X標槓理論’與詞組結構」，同上，257—547頁。
———1989 e.「‘原則及參數語法’與英華對比分析」（シンガポールでの‘世界華文教學研討會’における発表原稿）。
塚本秀樹1987.「日本語における複合動詞と格支配」，『言語学の視界』大學書林，127—144頁。